

研究だより

青森市沖館 青森営林局構内
農林省林業試験場青森支場(電話青森6876番)

編集責任人 木村 武 松

ウルシに関する試験を開始 するに當つて

好摩分湯 千葉 春 美

試験を実施することゝなつたいきさつ

これまで当分場に於て、ウルシ・クリ・キリ・コウソ等の品種ならびに施肥関係の試験研究が実行されているが、国有林内に試験地を設定して植栽保育に関する試験を実施することは経費面からの制約を受け、なかなか実施困難の実状であつた。

しかるに本年度から西村支場長、村井造林研究室長等の特別な御配慮によつて青森支場の新規テーマとして取上げていたゞき、本場、林野廳の承認のもとにウルシを対象とした試験研究が行われることになつた。

こゝで何故ウルシが取上げられたか、その理由を述べると

①青森営林局管内が全国的にみてウルシ生産に重要な役割をしていること。

すなわち生産状況を各府縣別にみると次のヒストグラフでわかる通り、ウルシ生産量が我が青森管内で全国の生産量の約40%をしめている現状であり東北全体では約60%の龐大な生産をあげていることがわかる。

②需給状態からも増産が熱望されている。

全国の生産量が總需要量の僅か20分の1程度しか生産されず、多くは佛印・支那方面より輸入している現状である。

③農山村の經濟振興上特用樹の模範的造林地を作り指導する必要があること。

東北には山村農家が多く、しかもこれらの山村農家は国有林經營には勿論、一般林業上にも大事な勞力の供給地である。

この山村農家は一度農業恐慌がおしよせると一番ひどいめにあわされているのがこれまでの例である。このような經濟恐慌に對處するためにも農業經營の多角化が強く叫ばれ、比較的短期間に資金回收が得られる特用樹の導入がとなえられている。

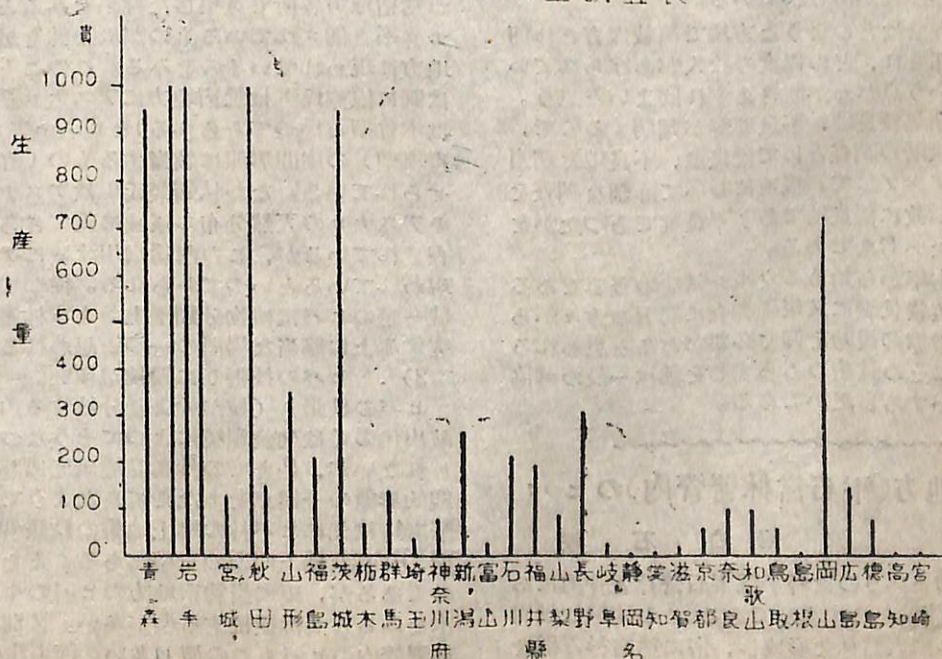
以上の現状から国有林として地元山村民に模範的なものをつくり指導する必要がある。

④過去の不成績な原因を追求する必要がある。

かつて国有林においてウルシの造林が行われたが餘り良好な成績をおさめ得なかつた。この原因を究明し再び失敗を繰返さすべきでない。

以上の如く需給關係、農山村の經濟振興、過去の失敗原因追求等、種々の情勢から青森支場としてこの問題を取上げ、窮屈な試験研究費のなかゝら幾分かをねん出してあえて試験を実施することゝなつたものである。

添府縣別生産數量調査表



どんな試験を実施するか

試験内容を大別すると、植栽試験と実態調査にわけられる。

植栽試験は2カ所程度設定する方針で、火山灰土壌地帯と古生層地帯に設置する豫定である。期間は一應12年としてスタートすることとし、目的はこれまで畦畔等の空地利用の植栽が大部分であったが、このような方法で飛躍的な増産が期待できないのみならず、林業本来の立場から山地を対象とした合理的なウルシ樹造成方法を検討究明することに主眼をおきしめることとなつたものである。

具体的方法として

- ①施肥・肥料木混植による生育の比較ならびに経済上の検討
- ②仕立方の比較
- ③植栽方法の検討
- (イ)植栽本数 (ロ)植穴の大きさと生育関係
- (ハ)植栽時期

以上の三点から追求することとなつたものである。なおこれ等試験に使用する面積は1~2ha程度を目標とし適当な場所をみつけることにした。

次に実態調査であるが、この目的は過去に実施したものが概ね不成績に終つていたので、その原因を究明し今後植栽の基礎資料とする爲のものである。したがって実施豫定年数も2カ年位で取組める方針である。

その方法は第一段階として概況把握調査を書面によつて各営林署に照會して調査することとなつてゐる。すでにこの書面は局造林課の御厚意によつて各署へ照會が出されてゐる。

この調査ではどのような方法で植栽保育され何年位で伐採され、どの程度の収入があげられているか、という点がわかりさえすればよいと思う。この調査結果優良地、不良地等が判明するので、更に第二段階の調査として優良地、不良地を適当にピックアップして、現地において詳細な調査を行い、何が故に優良地であり不良地であつたかを明確にしたい考えである。

以上は本年から始めるウルシ試験の概要であるが、今後植栽試験に又現地調査に局署の方々から大いに御指導御援助を仰ぐ必要があると思われるので此處にその試験のあらすじを述べ一段の御協力を御願ひするしだいである。

鶯宿地方(雫石営林署管内)のヒバ

支 場 白 石 明

鶯宿地方というのは岩手縣雫石営林署管内にある。鶯宿川流域をさすものである。この流域は秋田杉が越境して天然林を形成し、俗に鶯宿杉と稱せ

られている。この附近におけるヒバの分布をみれば、本流域ではスギを主体として尾根部にヒバを混じ、東側に隣接する南畑流域ではヒバ、ネツコを主体として僅少のスギを混じているのである。雫石営林署昭和27年度調査の第七次経営案方針書によれば、鶯宿川流域においてはスギ純林或はスギ、ヒバ(ネツコ)の混交林が存在し、往時は美林を呈しておつたようである。更に広葉樹、ヒバ(ネツコ)の混交林も存する。また部分的にはヒバ純林もある。鶯宿川流域近邊でヒバの最も大きいものは胸高60cm位に達するものもある。ヒバは小径木多く更新状態も良好であるが、やゝ大きい中径木及び大径木になると一般に樹型が亂れるものゝようである。

1). アスナロとヒノキアスナロが混入する。

青森で普通いうヒバはアスナロ属に属することは周知のことであるが、このアスナロ属にはアスナロとヒノキアスナロとがあり、兩系の分布區域界は大凡山形縣と福島縣との境、板谷峠(北緯37°45')であるとウイリソンが言い出してから日本の學者は大抵これを認容している。村井氏¹⁾によればアスナロ系(村井氏は南日本系といつて居られる)のものとヒノキアスナロ系(村井氏の所謂北日本系)のものとは形態的に毬果と材とに差がある。即ち毬果についてみるとヒノキアスナロ系が球形で黄褐色を呈し、種鱗は平面乃至稍々ふくらみ臍部微かに凸起するに反し、アスナロ系は凹凸に富み紫黒色で白粉を帯び、種鱗の先端は三角形鉸形に著しく凸起して反轉し、その先端の臍部は著しく凸起する。材についてみるとヒノキアスナロ系は直通な大材をなし耐朽力は弱い。今筆者が鶯宿地方各所で蒐集した毬果をみると所謂アスナロ系と稱されているものが板谷峠を越えて鶯宿地方に現われているのをみる。このことについては既に佐藤氏²⁾は鶯宿地方にアスナロ系(佐藤氏は木曾型といつておられる)とヒノキアスナロ系(青森型)の中間形態に該当するものゝ存在を報告せられている。なお林彌榮氏³⁾はアスナロとヒノキアスナロの天然分布の區域に就てさらに詳細調査されているが、この内鶯宿川流域にアスナロが現われているといつておられる。従つて鶯宿川流域一帯のヒバは植物分類學上および林業品種を考究する上に適当な場所の一つと思われる。

2). ヒバの枝張りについて振枝が多い。

ヒバの枝張り(枝が幹より分岐する角度)即ち岐出角の差は勿論環境によつてそうなのかもしれないが、是までの林業品種研究において、外觀的形態の一拠点をあたえてきたようであるが、筆者⁴⁾は先にヒバ林の郷土地帯の枝條型を水平型、上向型、極上向型の三型があることを報告したのであるが、更に当鶯宿地方のヒバのやゝ大きい木をみると曲折振扭する型が多い。又別に深浦営林署管内のヒバもこの型が多い。即ち津輕、下北

研究だより

兩半島の所謂郷土地帯を離れた環境不適なヒバはこのような枝の型をなすのではなからうか。更にすんで想像すればこのような型は成長の悪いことを示すものではなからうか。

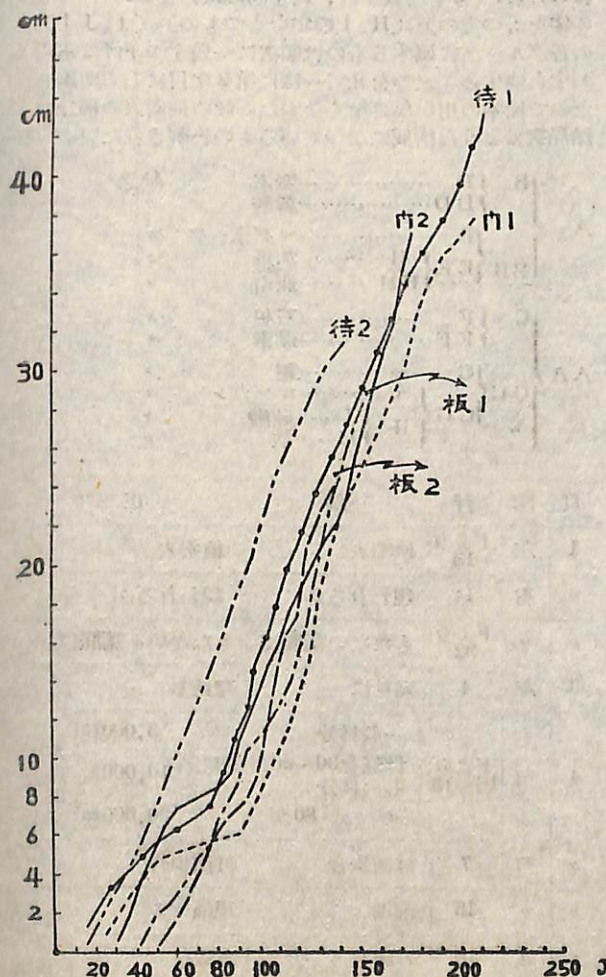
3). 胸高直径40cm位になると殆ど腐れが入る。

ヒバの中心郷土地帯では大体胸高直径80cm以上位になるとそろそろ根元に近い樹幹横断面の中心部周辺に腐れが入るのを時折見受けるが当地方においては殆ど40cm級に達するとその腐れが入つて来ており当地方におけるヒバの伐期並びに利用上特に考慮すべき事柄の一つであると思う。

4). 鶯宿地方のヒバの成長

当地方内のヒバの生育している代表的個所であり鶯宿川の支流である待多部沢、門戸沢、板越沢の各流域において上層のよい木と思われるもの16本をとつて、胸高直径の成長曲線を示すと附圖のようになる。今腐れが入る大体40cm級の年令を平均してみると、大体210年となる。尤も資料が少く、之を以て本地方の成長とみなすのは早断

鶯石管内ヒバ胸高直径成長曲線



であるが今津軽、下北地方のヒバの成長径路を示すものとして志水氏⁵⁾の成長曲線(田名部事業区において位置別…沢, 中腹, 峰部), 方位別に更に出端部奥部別に最優良の成長を示すものと思われる所謂一級木につき作成したもの)及び清水氏⁶⁾のもの(大畑, 内真部, 田名部, 大畑管内において比較的良好な成長をなしたと思われる38本を選んで一般的な成長径路を求めたもの)とについて40cmに達する年令を調べて当地方のものとを對比してみることとする。即ち志水氏の地位のよい所では80年, 悪いところで155年, 清水氏は180年(晩熟型), 155年(早熟型)となつており, 本地方のヒバは郷土地帯である津軽, 下北地方より悪いこととなる。

参考文献

- 1). 村井三郎: 東北地方の主要造林樹種とその變種問題, 国土再建造林技術講演集, 青森林友協會(1947) 146~147頁
- 2). 佐藤敬二: 青森營林局管内産二三主要林木の樹相及び林相特に品種並び更新に関する考察, 青森營林局(1935) 40頁
- 3). 林彌榮: アスナロとヒノキアスナロの分類學的考察と天然分布, 第61回日本林學會大會講演集, 日本林學會誌(1952) 97頁
- 4). 白石明: ヒバ幼壯令林の枝條型と成長(豫報) 第四回林業試験研究発表會記録, 林試青森支場(1952) 80~83頁
- 5). 志水一男: ひば林分=於ケルすぎ造林ノ較利學的的研究, 青森林友, 第55號(1953) 17頁
- 6). 清水建介: 津軽, 下北兩地方のヒバ天然林に於けるヒバの胸高直径生長径路に就て, 林學會雜誌19卷12號(1937) 630頁

學術會議, 登録カードに就て

日本學術會議は政府の諮問機關であるとともに科學者の内外に對する代表機關として重要性を認められており, 機構, 実績等は已に御承知の通りであるが, 今年末は第三期會議員の選舉が行われるため, 現在, 學術會議選舉管理會において各有資格者に對し登録カードの提出を勧誘している状態である。

我々林學, 林業に従事する者にとつて, 仕事の上の代表者を多数送つてその地位の向上を計らんとする事は他學問, 他産業より一層切実なものがあつて, 是非とも實現せしめなければならない重要問題である。

登録カードは相当広い範囲に亘つて配布されているが, 一個人に對して二通以上のカードが送られた例もある反面, 調査洩れのためか又はカード送達手違いの爲めか未着の有資格者もあるので, 餘分のカードは各人が考えて捨てる事なく, 出来るだけ有権者を多くする様御協力願ひたい。(M)

